ろが，神は自己を認識するまでもなく最初から神である筈である。何故，救済が約束されているにも拘らずファウストは悲劇と呼ばれているか。何故，神はわざわざ自己を認識しなければならないのか，ここにも吾々の考えるべき問題がある。

教養とは決して該博な知識でも，高尚な趣味でも，立派な思想でもない。まして，自由に着たり脱いだりできる着物でもない。人間の裡に可能性として孕まれている固有の，美しい，貴重な本質の形成が教養である。その限り，教養は思索や鑑賞でなく，行為，活動，努力，闘いでなければならない。温室の中に咲く美しくはあるが，ひよわな花であってはならない。広い世間の舞台に立って，あらゆる困難と卑俗さと醜さとに揉まれながら獲得される涙と汗とにまみれた筋金の通った金剛不壊の結晶でなければならない。「人間よ，人間らしくあれ」とルソォが呼び，「自分自身を見失はなければどんな生活を送ってもよい。本来あるところのもので常にあればすべてを失っても良い」とゲエテが言ったのは，この意味であろう。

爾来，教養の必要性を説く声は喧しく，教養を求める意欲はいよいよ広く芽生え来ているが，思想の混乱と不安定な世界情勢の中にあって，学問・教育に携わり，教養を積もうと志すことにどの様な意義と目的とがあらねばならないか，それを吾々は今こそ真剣に考えて見なければならないと思う。

近　況　報　告

渡　辺　　光

お茶の水地理の編集委員から近況を随筆風に書けという御依頼を受けました。昭和４５年の退職以来も，私の主観としては，特に改まって御報告申し上げることもない程の凡凡たる月日を送っておりましたが，６年に垂んとする歳月を経て顧みてみますと，当時と今とでは，かなり身辺の様子も違っておるのに気がつきました。しかし，この全期間の変化の過程を御報告申し上げますと長くなりますので，昭和５０年に限り，それも学界に関係のある生活の律動及び関連した感想を書き綴ってみます。

色々細かいことはありましたが，私にとっては次の３つを挙げたいと思います。まず２月には，それまで務めさせて載いた日本国際地図学会の会長を，もう一期続けるように御推戴をうけたことであります。又４月２９日の天長の佳節には，学界人として大変名誉なことでありますが，日本地理学会創立５０年を期し，学会から名誉会員に選んで載いたことであります。顧みてみますと，実際はさして功績があったわけでもなく，むしろ会から御世話になりっぱなしでありますが，恐らくは，昭和48年９月２日に満７０才に達したことと，会員歴４６年余りという，物理的理由が会員の御目にとまった為と思います。いづれに致しましても大変有難い次第であります。

最後の１つは，８月１８日から３０日まで，カナダのバンクーバー市ブリティッシコロンビア大学で開かれた太平洋学術会議に出席し，そこで昭和４６年以来，９年間に亘って務めさせて載いた太平洋学術協会地理学委員会委員長の任から解放されたことであります。私に代ってこれから委員長をやって下さる方は，オーストラリアの国立大学（カンベラ）のワード（Ward，A．D．）教授であります。

地形図の意味について　日本国際地図学会に関係している長い期間を通して，一再ならず出された疑問の一つに，「地形図」という名称の由来があります。どう解釈してみても，地形図の内容は，自然・文化に亘る地域構成要素を詳細に図示しているのに，これに地形なる名称を与えることは，いささか無理があるように感ぜられるからであります。しかし，この言葉は泰西語でトポグラフィーを表す地図，即ち，英語流に表せばtopographic mapの訳とすれば了解がつくのであります。元来トポグラフィーは小地域の詳細な地誌的情報の意でありまして，今日のように「地形」に限定されて使われ出したのは，幕末頃からであります。ところが地形図は１８世紀後半にフランスのカシニ三世により製作が始まり，列国がこれに続き英国で最初のtopographic mapが出来たのは１９世紀の初年の１８０１年であったわけであります。

釈迦に説法の感がありますが，以上のような意味は，ギリシア時代に確立していたのでありまして，プトレマイオスの地理学入門によれば，geographyは世界を一単位として取扱う場合，chorographyは地域・地方を取扱う場合であるのに対して，topographyは小地域の詳密な記載の意味であるとされております。toposは英語のplace(場所)を意味する語であります。それでありますから地形図は，内容的にも，意味の上からも詳密地誌図であります。

「将来」の範囲について　今回の太平洋学術会議の中心的課題はMankind's Future in the Pacific「太平洋圏における人類の将来」でありました。しかし，これに対するアプローチの立場は，わかっているようでわからない点が多いのであります。その最初にぶつかる問題　は「将来」の範囲であります。若し仮に５００年及至１０００年，或はそれ以上の人類の将来を論じようとするならば，過去から現在に至った過程を外挿することによって論ずることは，学術的には無意味であります。今までの歴史の教えるところによっても，途次に全体の進行方向に変向を迫るような社会・経済，政治革命，乃至は世界情勢の変革が生起する蓋然性が極めて大きいからであります。一方，多くの国が実施している国策的計画，例えば５カ年計画などは，むしろ行政・政治の範疇であり，学術的の会議で云々すべき問題ではありません。学者が良心を以て論じ得る範囲は，人間１代の活動期間である数十年から，せいぜい１００年（１世紀）程度までではありますまいか。

環境アセスメントは一体何を指すのか　この言葉程，この頃の流行語であり乍ら，使い方の曖昧な言葉を知りません。しかしこれには，スコープScientific Committee on Problems of Environmentの定義があります。それは「大規模の土地事業などを起す場合に，その影響を予測し，評価して為政者・計画立案者に忠言，警告，或は中止勧告を与える行為を「環境への影響の評価（島津康男氏）」Environmental Impact Assessmentとしたのに対して，環境アセスメントEnvironmental Assessment　の方はもっと包括的内容を持ち，「自然の状態及び改変された状態としての環境の性格に関連した環境計画と定義される」として両者を区別しております。つまり，前者は予測を目的としているのに対して，後者は予測も含みますが事前の環境評価も重要な課題となっております。しかし，日本では両者は，環境の専門家の間に於てすら往々にして甚だ混乱して用いられており，後者のことを環境アセスメントと云って我々を迷わしておるのが現状であります。